The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂と白鹿洞書院
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂研究. 2012, 3, p. 17-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24664
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂と白鹿洞書院

湯浅邦弘

はじめに

平成十三年（二〇〇一）、大阪大学は創立七十周年を迎え、その記念事業の一環としてバーチャル懐徳堂を制作した。これは、江戸時代の懐徳堂学舎講堂内をＣＧ（コンピューターグラフィクス）によって再現したもので、制作に際しては、「旧懐徳堂平面図」（『懐徳』第九号所収）と大阪大学懐徳堂文庫所蔵の多数の器物類が活用された。江戸時代の懐徳堂学舎は現存しないが、残された平面図と当時の貴重資料とによって、講堂内が再現されたのである。

現在、バーチャル懐徳堂は、大阪大学文学研究科内の懐徳堂研究センターにおいて公開している。ここでは、簡単なマウス操作により、講堂内を自由に閲覧することができ、あたかも閲覧者が講堂内にいるかのような感覚にとらわれる。また、この簡易版を、懐徳堂研究の総合サイト「ＷＥＢ懐徳堂 http://kaitokudo.jp/」において、「ＣＧ懐徳堂ＷＥＢ版」と題して公開しており、MS Media Player またはApple Quicktime により閲覧できる。

一、朱子学国際学会の開催

ところで、このバーチャル懐徳堂制作に活用された器物を改めて振り返ってみると、多くが、いわゆる朱子学に関わる資料であることに気づく。たとえば、宋六君子図、朱文公大書拓本、白鹿洞書院掲示、入徳門聯などである。

こうした懐徳堂と朱子学との関係について、認識を新

たにする機会に先頃恵まれた。「哲學與時代：朱子學國際學術研討會」と題する国際学会がそれである。中華朱子学会、南昌大学江右哲学研究中心、南昌大学人文学院哲学系、廬山白鹿洞書院管理委員会、九江学院廬山文化研究中心の共催で、会期は二〇一一年十月十八日から二十二日、会場は中国江西省の南昌大学および廬山の白鹿洞書院である。発表者五十六名という大規模な学会であった。

要請を受けて日本から出席したのは、筆者の他、関西大学の吾妻重二教授、島根大学の竹田健二教授、茨城大学の井澤耕一准教授、そして、現在サバティカルで復旦大学哲学学院専家として上海に滞在中の鶴成久章福岡教育大学教授の五名である。

まず、十八日午後に、南昌大学に全員が集合して受付を済ませ、学会プログラム、会議論文集、名札などを受領した。翌日から場所を白鹿洞書院に移して会議が始まった。白鹿洞書院は、南昌大学から真北に約百二十キロメートルの所に位置する。中国四代書院の一つで、創建は唐代にさかのぼる。南宋の朱子（朱熹）が書院を再建して学を講じたことで儒学の聖地となった。朱子学の国際学会としては誠に相応しい会場である。

五名の内、懐徳堂に関する発表を行ったのは、筆者と竹田氏の両名であった。筆者は、江戸時代の懐徳堂と朱子学との関係について、竹田氏は、重建懐徳堂と朱子学の関係について、それぞれ中国語による発表を行った。以下では、筆者の発表内容を中心として、その概要を紹介したい。

二、懐徳堂と朱子学

筆者は、十月二十日の第七分科会（八時四十分～十時）において、江戸時代の懐徳堂が朱子学を基本とする漢学

塾であることを、具体的な資料を使って明らかにした。発表題目は「日本漢學與朱子學―江戸時代大阪「懐徳堂」的學術―」である。

朱文公大書拓本

第一に取り上げたのは、朱文公大書拓本(外形寸法(cm)各縦127.8×横33.6)。これは、朱子の書の摸刻を拓本にとったものである。

全四幅。底本となった朱子の四行書は、徳川将軍家の所蔵品であったが、中井竹山がこれを借用し、二枚四面の板に摸刻した。この刻板からさらに拓本をとり、掛軸の形に表装したものが、この資料である。拓本の基となった版木も、現在、大阪大学懐徳堂文庫に保管されている。

ここには、「読聖賢書」「立修斉志」「存忠孝心」「行仁義事」(聖賢の書を読み、修斉の志を立て、忠孝の心を存し、仁義の事を行う)と記されている。これは、人間が学問を修め実行に移す際の姿勢を、卑近な事柄から順を追って示したものである。まず「聖賢の書」すなわち儒家の経典を読み、ついで「修身斉家(我が身をととのえ我が家をととのえる)」を行うという志を立て、また君親に対して生まれつき持っている「忠孝の心」を失わず、最終的には「仁義の事」を実践する、という意味で

ある。

懐徳堂は、官許学問所として、幕府の認めた官学である朱子学を奉じ、荻生徂徠以降に盛んとなった朱子批判には反対の立場をとっていた。竹山が将軍家よりこの四

懐徳堂CG画面講堂部

行書を借り受けて摸刻させたことは、朱子学を奉じる懐徳堂の立場をより鮮明にする行為でもあったと考えられる。

この朱文公大書拓本を、バーチャル懐徳堂のCG画面によって確認してみよう。

上図が講堂部分で、中央奥に朱文公大書拓本が見える。

白鹿洞書院掲示

次に、白鹿洞書院掲示（外形寸法（cm）　縦41.3×横167.0(残存部分)）。白鹿洞書院掲示とは、周知のように、朱子が白鹿洞書院を再建する際に定めた学生心得である。後に朱子学の普及とともに、中国をはじめとする近隣諸国の学校において、教育の大綱として利用され続けた。朱子学を基盤とした懐徳堂も例外ではなく、天明二年（一七八二）に中井履軒がこれを抄写して堂内に掲げた。本資料はその拓本である。

なお、懐徳堂所蔵の拓本は、冒頭の「父子有親君臣有義夫婦有別　長幼有序朋友」の三行部分が破断により残欠となっており、周辺部も劣化していた。そこで、履軒の筆跡をもとに、CGで復元した。

まず、図1が、大阪大学懐徳堂文庫に現存する白鹿洞書院掲示拓本である。二百年以上前の資料なので、周囲

図1

図2

図3

がかなり劣化している。

次に、図2は、欠損部分について、文言を補い、中井履軒の筆跡に基づいて書き起こしたものである。

そして図3が、欠損部分をデジタル合成したものであ

る。江戸時代には、これが懐徳堂の講堂に掲げられていた。

CG画面では、左上に見える。

堂聯

最後に、堂聯（外形寸法（㎝）　縦107.4×横18.1）。堂聯とは、懐徳堂の講堂の二つの柱に掲示されていた聯で、中井竹山の揮毫による。署名の「渫翁」は竹山の号。この聯は、本来、「經術心之準繩、文章道之羽翼」（経術は心の準縄、文章は道の羽翼）という上下二句から成っており、各々一枚の紙に筆写され、左右相対して掲げられていた。現在、大阪大学懐徳堂文庫に伝わっているのは、向かって左側にあった下聯「文章道之羽翼」のみである。そこで、竹山の筆跡をもとに、上聯「經術心之準繩」の部分をCGで復元した。

右が、CGによって復元された上聯。左が、懐徳堂文庫に残っている下聯である。

「経術」とは儒学の経典に関する学術、「準繩」とは水平を測るみずもりと直線を決める墨縄（すみなわ）。転じて、規則・標準の意。「羽翼」とは、鳥の羽と翼。転じて、鳥の羽のように左右から補佐することである。

この聯に対する解説が、竹山の書簡を集成した『竹山先生国字牘』に見える。その中で竹山は、若年の頃から学問修行の主旨は「経術」「文章」の二つにあり、この二つを極めなければ大成とは言えないと述べている。

竹山が記したこの聯は、文章を軽視する当時の風潮を批判し、「経術」と「文章」とが表裏一体の関係にあることを宣言しているのである。

このように、懐徳堂の基本的な学問は、朱子学であった。当時、日本の学術界に大きな影響を持って流布していたのは、荻生徂徠の反朱子学の立場であった。これに対して、懐徳堂では、講堂の中にも、朱子学関係の文言を掲示し、自らが朱子学の学校であることを明らかにした。

もっとも、中井履軒は、その代表作『論語逢原』などにおいて、朱子や程子の説を部分的に批判する場合もある[1]。ただこれは、懐徳堂の自由な学風を象徴するもので、

懐徳堂全体の基本的な学問が反朱子学であったことを意味しているのではない。

現在、大阪大学懐徳堂文庫に残る五万点にも及ぶ資料は、懐徳堂が朱子学の学校であったことを明らかにしている。

三、書院としての懐徳堂

次に、同日の第六分科会（十時三十分～十一時五十分）で竹田健二氏が「「重建懐徳堂」的朱子學」と題して発表した。

内容は、大正時代に再建された懐徳堂（いわゆる重建懐徳堂）で講じられた学問について、重建懐徳堂初代教授・松山直蔵の学問を中心に検討を加えたもので、その概要は以下の通りである。

重建懐徳堂で行われた授業は、漢学を中核としながらも、日本の古典学や西洋の人文学・歴史学・経済学・政治学・法学・社会学・生物学・化学など、自然科学を含む実に多様な領域に及ぶものであった。大正期を見る限り、漢学の中でも朱子学に関する講義を行ったのは教授の松山直蔵のみである。

また、一般に松山の専門は宋学であったとされるが、松山の関心は宋学のみに向けられていた訳ではなく、広く中国思想史全体の流れに対して向けられていた。さらに、松山は西洋哲学に対しても関心を有していた。これは、松山が近代日本の学校教育制度の中で初等教育から高等教育（東京帝国大学大学院）までを受け、その中で彼の学問が形成されたためと考えられる。

江戸時代の懐徳堂は朱子学を基本とし、その堂内には「白鹿洞書院掲示」も掲げられていた。しかし、重建懐徳堂においては「白鹿洞書院掲示」も掲げられず、ことさらに朱子学を重んじていたとは見なしがたい。重建懐徳堂は江戸時代の懐徳堂をそのまま単純に復活させたようなものなのではなかったのである。

筆者と竹田氏が、同日の会議で連続して懐徳堂での発表を行ったことにより、参加者に懐徳堂の存在と意義をアピールすることができたと考える。

我々の発表については、たとえば次のような反応があった。まず筆者の発表については、朱文公大書拓本が江戸幕府から借用したものである点について、それが可能となったのはなぜか、またそもそも幕府が朱子の書を保有していたのはなぜかとの質問があった。幕府と懐徳堂との関係、さらに具体的に言えば、松平定信と中井竹山との親密な関係を想起すれば、懐徳堂が幕府から朱子

白鹿洞書院にて、学会出席者（左から吾妻、湯浅、鶴成、井澤、竹田）、後ろは朱子像

の四行書を借用できたことは十分に説明が付くが、そもそも幕府がどのような経緯で朱子の書を入手したのか。この点については、確かに不明な点があり、今後の課題だと感じた。

また、竹田氏の発表については、学舎が現存しない懐徳堂は、現在、どのような形態で運営され、またどのような活動を継続しているかとの質問があった。これについて竹田氏は、財団法人懐徳堂記念会が大阪大学と協力して運営しており、記念会が設立されてからすでに百年が経過したこと、また、現在も会員や市民向けの多くの講座が公開されていることを説明した。

朱子学の聖地である白鹿洞書院は、建物が現存しているものの、こうした国際学会以外には日常的な活動はなされていないようである。これに対して、懐徳堂は、建物こそないものの、二度の歴史の断絶を乗り越えて、今もその精神を活かした活動が続けられている。この点に、参加者は大いに関心を抱いたようであった。

今回、世界の研究者に懐徳堂の存在と意義を明示できた点は大きな収穫であったが、一方で、まだその認知度は低いとも感じられた。例えば、現地で入手した『千年学府―白鹿洞書院―』（江西人民出版社、二〇〇三年）には、「白鹿洞書院在国外的影響」の章があり、日本の

江戸時代にも若干の言及があるが、そこには、林羅山、中江藤樹、山崎闇斎、伊藤仁斎、貝原益軒などの人名、あるいは、昌平黌の校名はあっても、懐徳堂はまったく取り上げられていない。

仄聞するところによれば、この学会をさらに拡大して、二〇一二年には「世界書院学会」が開催されるという。朱子学の学校であった懐徳堂も、「懐徳書院」と称されることがあった[2]。朱子学あるいは書院の歴史の中に懐徳堂を位置づけていく努力が必要となろう。

注

（1）例えば、『論語』の冒頭部について、中井履軒は、次のように注釈する。

○「子曰、學而時習、不亦説乎」

・性善復初、及先後覺、此章不必言。

・鳥雛稍長、欲飛而不能、且尋樹枝、作咫尺之飛、頻上下左右焉、謂之習耳。程説重習、亦謂學之不已也、未允。

○「有朋自遠方來、不亦樂乎」

・近者未足以爲樂、故唯舉遠方耳。註近者可知、失語氣。

○「人不知而不慍、不亦君子乎」

・此章三節三平、不得相紐連。註學之正、習之熟等、並失正意。

・説樂元非工夫、亦難事。程註、非樂不足以語君子、大失之。樂由説而得、亦紐連之失、傷語氣者、所謂玩味之巵言、謂此類也。

（2）懐徳堂の「書院」としての性格について基礎的な考察を加えたものに、拙稿「書院としての懐徳堂」（『東アジア文化交渉学』別冊2「東アジアにおける書院研究」、関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS、二〇〇八年）、および「懐徳堂研究の可能性—韓国の書院と祖先祭祀儀礼から考える—」（『懐徳堂研究』第一号、二〇一〇年）などがある。